兵が、将校が 名もなき異郷の地に果て行く その数は知るを得ず」

―歩兵第十連隊の中隊長戦闘記録から―

(1)ソ連国境からルソン島へ

餓死寸前の痩せ衰えた将兵が米軍に投降したとき、所持品のすべてを没収された。しかし、歩兵第十連隊連隊砲中隊の中隊長里見憲貞は戦闘記録を隠して日本へ持ち帰ることができた。

「収容所到着日に、それまでの着衣と共に放棄せしも同夜陰に乗じ回収 所持しあり」

この記録は、戦後になって『痛恨』（一九七六年、私家版）として出版されたが、そこには対ソ戦のため駐屯した中国東北部からフィリピン・ルソン島での米軍との戦闘、そして敗走につづく連隊の壊滅までが克明につづられている。そこでこの記録をもとに、同じ中隊にいた兵士からの聞き取りを加えながら、岡山編成の歩兵第十連隊の終焉までをたどる。

一九四四年（昭和一九）

ソ連との国境の町、富錦の近くで陣地構築をしていたところ、南方戦線への移動命令がきた。

「七月三〇日　編成完結。生死を共にする部下は、小野少尉以下一二〇名と決定。」

「八月一日　（略）隊員一同戦地に出られる感激に酔いてその意気益々旺盛なり。」

「八月一四日―九月四日　海難事故に備え毎日漂水訓練、救命胴衣の不足を補うため、両節を残した青竹を組んだ物を使用す。」

これは釜山港でのこと。この頃には連合軍の魚雷攻撃で多くの日本の艦船が沈められており、青竹がいざというときの筏や救命胴衣として積み込まれた。まもなくこの危惧は現実となった。台湾を経由し、ルソン島北サンフェルナンド入港を前にして乾瑞丸が潜水艦の魚雷攻撃をうけ、わずか五〇秒で沈没した。乗船していた第十師団の各連隊一個大隊一、二〇〇人、歩兵第十連隊では第二大隊第五・第六中隊の二五〇人が死亡し、物資のすべてを失った。

十二月二二日、江ノ島丸に乗船した歩兵第十連隊主力は、無事にルソン島最北端のバドリオ岬に上陸した。二昼夜、死力をつくして陸揚作業をおこない、休むひまもなくカガヤン河谷を南下し、ルソン島中部のバカバックへ急進した。この泥濘四〇〇キロのあいだに、マラリヤなどの発熱患者が続発し、ゲリラから銃撃をうけた。

（2）ゲリラ討伐―斬首

一九四五年（昭和二〇）一月二五日、バカバックに到着。敵機十数機が宿営地を銃爆撃。二九日、ゲリラ討伐の命令を受ける。

「二月十三日　部落周辺に薄暮時を利し、潜伏斥候数組出するも、本夕は信号燈火なし。住民内に通匪者ありて、中隊の行動察知されしか。」

「二月二四日　（略）近々部隊は討伐を中止し、オリオン峠に陣地構築の内命ありて、部隊の秘密保持上、捕えし住民の処断をする。入隊浅き兵達初めての事にて、血潮の匂に恐れる態度あり。」

「処断」とは何を指すのか、この場にいた兵、石井（仮名、岡山市）は次のように話した。住民六、七人を後ろ手に縛って壕のそばにならべ、軍刀で首を斬った。だが一刀で斬り落せるものではない。斬りそこねた住民を刺したあと、壕の中へつき落とし、土をかぶせて埋めた。が、踏み固めるその足下から、「うーん、うーん、って、食用蛙のような呻き声が漏れてきてね、今さっきまで息しとったんを埋めたんだから」。

すでに米軍は、一月九日にはルソン島中部西岸のリンガエン湾から上陸し、二月三日にはルソン島南部のマニラに進出していた。それにたいし日本軍は、ルソン島北部の穀倉地帯であるカガヤン河谷を内懐とする山岳地帯で永久抗戦を構想し、そのため南部のマニラ方面からカガヤン河谷への関門、バレテ峠とサラクサス峠に強固な防衛陣地をつくりつつあった。

バレテ峠へ南下する里見中隊は、その手前で在留邦人とすれ違った。

「三月六日　五時、ソラノ南方二キロにて、夜明けとなり、大休止に入る。同地には、マニラ周辺より集まりし在留日本人二五〇〇名位あると聞く。戦局の逼迫に身も心もあらざるにや、これら日本人誰一人として我々に声だけ掛け来たらず（ママ）。しかれども、幼き姉弟が、それぞれの小さき背にリュックを負い、母親を中に手を取り合って夜道を後方にたどる姿は悲壮以外何者もなし。」

（3）バレテ峠の激戦―斬り込み

歩兵第十連隊の一部は二月中旬までに、主力は三月二十日までにバレテ峠に陣地をつくり、それ以降、米軍の進攻をはばむため死闘をくりひろげた。

「三月十二日　未明にバレテ峠大和川の師団司令部に到着し、（略）昼夜休みなく射ち来る敵の砲撃と爆撃は、深山、渓谷に木霊して、激戦の凄じさを直接肌身に感じさせる。」

「三月二七日　八時三〇分頃、敵新設中の補給路の両側に位置し、好目標待つも来たらず。遂に警戒ジープを狙撃するや全速力で遠く離れ去りぬ。糧秣なく、二日間水以外を口にせず、止むなく帰途につくも空腹にて歩行十分ならず、一八時、小野小隊陣地につく。」

石井によると、三月にはいると一人一日米四勺が支給されるだけで、全員極度に衰弱したという。それでも重い砲と弾薬を転々と移動させ、果敢に砲撃した。

「四月五日　（略）小野小隊、山麓の敵幕舎の群に射撃中にして、予想戦果、幕舎約二〇、弾薬集積所とおぼしき大爆発箇所一、火災箇所三、推定殺傷人員一〇〇程度と思われる。」

「四月六日　胄山に陣地を変換、妙高山の敵幕舎を目標に射撃するも、距離遠く弾着観測殆ど不可能なるにより発射弾六にて中止す。敵如何なる兵器を使用するや、中隊射撃を始めるや時を経ずして射ち返し来る。本日も約三、四〇発が砲付近に落下するも異常なし。」

米軍を砲撃すると、その何倍もの「返礼弾」をあび、そのたびに陣地を移動した。ブルドーザーで道をひらき、戦車をくりだす米軍に、日本軍は夜陰に乗じて米軍幕舎に近づき、斬り込んだ。

「四月九日　要山より中隊主力移動し来る。斬込隊は、五名一組で四組を編成、（略）」

「四月十五日　斬込隊の予定帰隊日なり、（略）一六時、松広、明石兵長帰り来りて、井上曹長戦死の報告を受る。両名それぞれ負傷しありて沖軍医中尉をして手当をさす。他の斬込隊員は未だ帰らず。」、「四月十七日　斬込隊、出発以来七日目、糧食もなきに、如何にしあるや。」

八人の斬込隊員がついに帰らなかった。

石井は、このときの斬り込みの様子を次のように語った。

米軍の幕舎に軽機関銃を掃射し、手榴弾を戦車の列と幕舎に投げ込む。悲鳴、怒号、断末魔のうめき声、一瞬にして修羅地獄と化した。即刻、米軍から反撃の掃射、二人が負傷した。逃げこんだ谷間まで捜索にきた米軍の銃弾で、分隊長が死亡した。その小指を切り、手を合わせて、遺体を落ち葉に埋めて、「友軍がこの山を奪ったときは立派にお祭りしますから、それまで一人で待っていてください」と別れを惜しんだ。そのときだった。迫撃砲の砲弾が頭上で炸裂した。「そうしたらどうしたと思います。分隊長の遺体の下へ三人の兵がもぐりこんだんです。今きれいに木の葉で埋めたのに。人間って浅ましい。自分が一番大事なんで……」。それを見ていた少尉は、砲撃がおさまると、遺体のそばに水と青木をそなえて「水まつり」をした。

（4）敗走―飢餓と病魔のあとに

米軍は、五月二四日にはバレテ峠を突破し、カガヤン河谷に通じる五号道路を雪崩をうって進攻した。バレテ峠の陣地を守備していた日本軍は包囲され、糧道を断たれたため、陣地を放棄し後退をよぎなくされた。直線で約八〇キロの道なきジャングル内を敗走する途中、まっさきに傷病兵が捨てられ、やがて飢餓と病魔にすべての将兵がおかされ、倒れていった。

「六月二日　略）部隊の陣地移動に伴ない、連隊の収容患者をゲリラ山に移動せしめるも、担送兵員なく、独自前進、これが為、途中にて力尽き倒れ在る兵二、唯息あるのみの者一、腐敗体二を見る。戦況利なき今より後この様な光景は、益々多きを数え、その悲惨さは一途倍加の道を辿ることは確実なり。故国の肉親が、この現実を想像だにすることならん。」

「六月五日　敵機ここ二、三日来その数増加し、活動も頓に激しくなりて、一日平均二、三百機なり。」

六月六日には兵員が少なくなり、連隊砲中隊の命でもある砲と弾薬を放棄するときがきた。神風山には、砲一門と弾薬一〇〇発を移動、他の二門及び速射砲全門、全弾射撃後処分」した。それぱかりか自力で歩けない傷病兵には自殺を言い渡した。患者収容能力なき今は、各自力で中隊に追及し得る者は直ちに神風山に前進、若し出来得ざりし場合には、帝国軍人としての最後を全うすべきよう事を諭す」。

六月十日、部隊とともに移動できず自決を願いでた傷病兵に、吾れ最後の時にと所持し在りし恩賜の煙草を与え、自決要領を授く。最早歩行出来ざるに付、山田伍長が背にし樹下に座せしむ。八時、手榴弾に依り立派な死を遂げる」。

前進中、四方山より北山の間、約一・五キロに一一遺体、北山、ゲリラ山間約一キロ程に九遺体在り」。

遺体は増えるばかりであった。六月十三日、部隊の通過後には毎日、疲労と飢えとマラリヤで、兵が、将校が名もなき異郷の地に果て行くその数は知るを得ず」。

六月三十日　道らしきもの皆無、河谷は愈々深くして到る処に白骨化の遺体を見る。（略）遺体一一、死期目前の戦友二を見る。」、七月一日　略）本日の遺体四、骨と皮これが死者の姿なり。」

戦後、慰霊団が収集した遺骨・遺品の一部　（写真は郡安泰三氏提供）

ついに人肉を食べるところまで追い詰められた。

「八月二日（略）これまでの転進中、随所で倒れし戦友の肉が切り取られあるを見聞するも、この事実は部隊全滅の時まで跡を断たないであろう。生きる苦しみは死の決意以上に難事なり。」

人肉を食べたという兵の一人（倉敷市）は次のように回想する。戦車第十連隊にいたとき、サラクサス峠で米軍と死闘のすえ負傷し、収容された野戦病院とともに北部の山中で飢餓線上をさまよった。このとき食料調達に芋畑へいった下士官と兵の二人が、サル二匹を撃ち殺し、その肉をもち帰った。傷病兵たちは塩も醤油もなしに飯盒で煮て食べた。「おいしかったのう、おいしかったのう」とみんな久しぶりの肉に満たされた。あれは人間の肉だという話が伝わってきたのは、そのあとだった。「それで自分は命を延ばしておりますわ」。そして、自分が死んだときは自分を食べて生き延びて日本へ帰ってくれ、と書いた紙切れをポケットに入れていた、という。

九月三日、平地にたどりつき、十分な食糧にありつく。

七日、「比島日本軍の戦闘行動即時中止、並に米軍指揮下に入るべし」という方面軍将校からの連絡を受ける。

十六日、戦没者の慰霊祭、軍旗奉焼。

十七日、米軍下に入る。「蓬髪破衣の敗軍の将兵に変貌した」。マニラ郊外の収容所へ移動するときは、「沿道の比島人は罵詈雑言を浴びせつつ投石を繰り返し（略）唯、肘をかざして飛来する石塊を防ぐのみ」であった。

十月十三日、広場に集合するよう指示があった。「この瞬間『戦犯、処刑』来るべきものが遂に……の思いが脳裏を走馬灯の如く横切る」。里見中隊長はすでにこのときから戦犯となり処刑されることを恐れていたようだ。だが、それは杞憂だった。集合した尉官以上約三〇〇人は、ただちにマニラ港から日本へ帰還したのである。

第十師団主要部隊　一四、〇八二人中、生還者一、三五九人（九・七パーセント）
歩兵第十連隊　三、一六二人中、生還者二二〇人（七・〇パーセント）
連隊砲中隊　一四〇人中（補充を含む）、生還者三〇人（二一・四パーセント）

（上羽　修「フィリピン飢餓戦線」、『総動員の時代』より、一部加筆）